

## 地域看護実習に自己評価を導入した学習効果

— 学生の自己目標および実習目標の両面から —

石川麻衣<sup>1)</sup>、川本美香<sup>2)</sup>、小澤若菜<sup>2)</sup>、時長美希<sup>3)</sup>

(2013年9月30日受付、2013年12月18日受理)

Learning effect of the introduction of self-evaluation in community nursing practicum

— From both sides of the practical objective and the goal of student themselves —

Mai ISHIKAWA<sup>1)</sup>, Mika KAWAMOTO<sup>2)</sup>, Wakana OZAWA<sup>2)</sup>, Miki TOKINAGA<sup>3)</sup>

(Received : September 30, 2013, Accepted : December 18, 2013)

### 要 旨

高知県立大学看護学部のカリキュラム改正に伴い、地域看護実習に学生の自己評価を取り入れた。本研究の目的は、学生が自己目標および実習目標に対して自己評価した内容から、地域看護実習に自己評価を導入した学習効果を明らかにし、効果的な教育方法を検討することである。

研究対象者は、平成24年度に地域看護実習を受講した学生である。実習評価用紙の記述から、学生の自己目標を質的帰納的に分析した。また、自己目標の評価及び実習目標の評価は評価項目毎に集計し、比較検討した。

その結果、自己目標には、地域看護実習での学習に関する目標と、自己の課題克服・自己成長に関する目標が含まれていた。実習目標の96.8%が目標達成を肯定的に評価されていた。自己目標を導入した効果として、実習目標に対する理解の深まり・明確化・焦点化につながる、講義・演習での学びを主体的に発展させようとする意識につながる、自己成長・自己の課題の克服がより強く意識される、が確認された。

キーワード：地域看護実習、自己評価、教育評価

### Abstract

With the curriculum revision of School of Nursing, University of Kochi, we adopted a self-evaluation of the student in community health nursing practicum. The purpose of this study is that from the contents of the student self-rated for the practical objective and self-goal, to clarify the learning effect of applying the self-assessment in community health nursing practicum, and we consider education an effective way through it.

Students who attend community nursing practicum in fiscal year 2012 were surveyed. From the description of the practicum evaluation form, we analyzed qualitatively and inductively the goal of students themselves. The evaluation of self-goal and practical objective, it adds up to the evaluation for each item, and the results were compared.

As a result, the self-goals included the goals for learning of community health nursing practicum, personal growth, and overcoming the challenges of their own. Practical objective items of 96.8% have been a positive view of the goal. As the effect of the introduction of self-goal, Understanding of the practical objective is focused. Deepen, Clarifying. Self-evaluation increases awareness of trying to develop proactively learn in lectures and exercises. And overcoming challenges and their own self-growth is consciousness more strongly.

Key words : Community Health Nursing Practicum, Self-evaluation, Educational evaluation

---

1) 高知県立大学看護学部 看護学科 講師 Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Lecturer  
2) 高知県立大学看護学部 看護学科 助教 Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor  
3) 高知県立大学看護学部 看護学科 教授 Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

## I. はじめに

高知県立大学看護学部では、カリキュラム改正を行い、平成24年度から、新カリキュラムに基づく地域看護実習を実施することとなった。

新カリキュラムに基づく地域看護実習の目標設定に際し、高知県立大学看護学部教育目的「専門職者としての姿勢を培い、地域の健康生活を創造する能力の育成」の達成に向け、実習の大目標に「地域看護活動を通して、看護専門職者としてのアイデンティティが形成できる」を追加した。また、この中目標として「看護職としての自己の学習課題を分析することができる」という目標を加えた。これにより、実習に、自己の学習課題の分析を促進するための積極的な教育・指導を組み入れる必要性が高まった。そこで、平成24年度より、学生の自己評価を取り入れることとした。

学生が評価する目標によって、実習目標に対する自己評価と、自分で設定した目標に対する自己評価がある。本実習では、両方を取り入れることとした。

学習者が自らを評価することは、主体的な学習展開の手段として重要<sup>1)</sup>であり、さらに、学生が自己評価をしていく習慣を身に付けることは、主体的に学習を進展させていく能力を身に付けることになり、将来にわたり自分自身で看護実践能力を高め続けていくための基盤として重要<sup>2)</sup>だとの指摘がある。

改正後初年度の実習を終えた現段階において、実習を行った学生がどのような自己目標を設定したか、また実習終了後に目標の達成度をどのように評価したかを分析し、そこから自己評価の導入がどのような成果をもたらしたか確認する必要があると考えた。さらに、これをもとに、実習における効果的な教育方法を検討し、教育の質向上を図ることが重要と考えた。

本研究の目的は、学生が自己目標および実習目標に対して自己評価した内容から地域看護実習に自己目標を導入した学習効果を明らかにし、効果的な教育方法を検討することである。

## II. 地域看護実習の概要及び自己評価実施方法

### 1. 地域看護実習の概要

地域看護実習の概要を表1に示す。本学では、3回生後期に、急性期看護実習・慢性期看護実習・小児看護実習・母性看護実習・精神看護実習・地域看護実習の6実習をローテーションで履修するプログラムとなっている。地域看護実習では、学生を6～8名のグループに分け、1回2グループで運営している。

地域看護実習目標は、7つの大目標と16の中目標で構成されている。実習目標4及び5には多くの要素が含まれているため、より具体的な目標設定が必要と考え、小目標を計16項目設定した。

### 2. 実習における自己評価の概要および実施方法

自己の学習課題の分析を促進するためには、地域看護に関連する目標だけでなく、これまでの学習過程で学生自身が感じた課題を克服するための自主的な取り組みと、その取り組みに対して自己評価をすることが重要だと考えた。そのため、実習目標に対する自己評価に、学生が設定した自己目標に対する自己評価を加えることとした。自己評価を実施した内容を記録するため、地域看護実習自己評価用紙を作成した。

#### 1) 実習目標に対する自己評価

実習目標は、大目標では表現が包括的なので評価が曖昧になる可能性があるため、中目標で評価するようにした。評価は、A：達成できた、から、D：できなかった、までの4段階評価とした。

#### 2) 自己目標の設定と評価

自己目標の設定と評価を、以下の手順で実施した。実習クール開始前に、①自分自身の実習目標、②理由（なぜそのような目標を立てたか、達成したいと思ったか）、③目標を達成するための計画（実施したいこと、力を入れたいこと、気を付け

たいこと等)、の3つを考え、自己評価用紙に記入してくるよう伝えた。実習初日の自己紹介の中で、自己目標を踏まえて、実習で何を学びたいと思っているか発表してもらった。その後グループ担当教員が自己評価用紙を確認した。実習期間中は、自己評価用紙を確認しながら、各自が目標達成に向け取り組むよう伝えた。実習終了後の評価として、①自分自身の実習目標に対する自己評価、②評価の理由・根拠、③今後の課題および課題を克服するための方策、の3つを自己評価用紙に記入した後、提出させた。

自己評価の導入について、学生に対し、実習開始前オリエンテーション時に説明した。自己評価の目的、自分自身の目標は何でも構わないが実習要綱やこれまでの学習内容・自己の学習課題等を参考に目標を立ててほしいこと、自分で目標達成に向け取り組むこと、学生の評価の高低は成績に考慮しないことを伝えた上で実施した。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 研究対象者

高知県立大学看護学部平成24年度地域看護実習を受講した学生82名

#### 2. 分析方法

地域看護実習評価用紙の記載内容を分析した。自己目標として記載された内容を、質的帰納的に分析した。「学生が自己目標で表現しようとしたものは何か？」という視点で意味の類似性をもとにグループ化を行い、グループの内容を端的な表現で命名した。

実習目標の評価及び自己目標の評価は、評価項目毎に集計し、比較検討した。

### Ⅳ. 倫理的配慮

学生の所属する高知県立大学看護学部には研究の

表1：地域看護実習の概要

単位・時間数	2単位・90時間
実習目的	地域社会での個人・家族・集団の生活および健康を総合的に理解する。生活に応じた援助方法や家族・集団に対する援助方法について学び、地域の健康課題に対して看護活動を展開する能力を養う。また、地域のヘルスケアシステムについて知り、他職種や住民との連携について考察し、その中での看護者の役割について理解を深めるとともに、学生自身の自己洞察を深め、専門職としての意識を啓発する。
実習地	保健所設置市
実習目標の構成 ※目標については表4参照	1. 地域住民及び地域(コミュニティ)の理解に関する目標 (中目標3項目) 2. 地区診断による地域の健康課題の明確化に関する目標 (中目標3項目) 3. 地域住民や関係者との関係づくりに関する目標 (中目標2項目) 4. 地域看護活動展開方法の習得に関する目標 (中目標3項目、小目標10項目) 地域看護活動計画立案, 公衆衛生看護活動展開方法の理解, 集団健康教育の実施 5. 地域全体を対象としたケアマネジメントの理解 (中目標2項目、小目標6項目) 連携・協働による活動展開方法の理解, 資源の充実およびケアシステム構築 6. 看護専門職者としてのアイデンティティ形成に関する目標 (中目標2項目) 7. 住民の権利を擁護する地域看護活動の理解に関する目標 (中目標1項目)
実習内容	◇実習地でのオリエンテーションに参加し、実習地の保健活動及び保健師の機能・役割に関する理解を深める。 ◇保健師より、担当地区における保健師活動及び家庭訪問支援に関する説明を受け、地区分析及び計画作成の参考とするとともに、受け持ち地区を対象とした保健師活動について、活動展開方法の理解を深める。また、保健師が行う家庭訪問の機能・役割について理解を深める ◇グループで地区踏査・情報収集を基とした地区分析を行い、地区の健康課題を見出し、次年度の活動計画を立案する。 ◇グループで集団を対象とした健康教育を企画・実施・評価する。 ◇保健師の関わる事業に参加し、事業の企画・実施・運営における保健師の機能・役割を把握するとともに、事業をより住民のヘルスニーズに適応させるための方法を考える。 ◇学生全員・臨地指導者・教員で反省会を行い、実習体験の振り返り、共有、自己の学習の方向付けを行うとともに、地域の健康問題を解決するための看護活動のあり方を考える。

主旨と倫理的配慮について説明し、承諾を文書で得た。その上で、学生に対し、口頭および文書で研究の主旨と倫理的配慮について説明し、文書で同意を得た。個人が特定できないよう、研究対象者の秘密の保持、個人を特定できる表現の不使用を約束した。また、研究対象者の成績評価を実施しない研究メンバーが同意書を確認した。高知県立大学看護研究倫理審査の承認を受けた。

## V. 結果

同意の得られた学生は63名(76.8%)であった。

### 1. 自己目標の内容と評価

63名の受講学生の掲げた自己目標は、117項目であった。これら117項目は、その内容から、地域看護実習での学習に関する目標と、自己の課題克服・自己成長に関する目標に大別された。

#### 1) 自己目標の内容

地域看護実習での学習に関する自己目標(表2)は、実習を通しての理解および実践力の向上に関する内容と、実習の目標達成に関連する内容があった。

実習を通しての理解および実践力向上に関する内容は、実習という学習機会を通じて、地域看護学の理解や実践力を身に付けることを目指した内容が含まれていた。実習だからこそその実際性や実施を強調した目標、講義・演習での学びを踏まえることを意識した目標が設定されていた。また、これまで地域看護学を学ぶ中で感じていた疑問や課題を追求することを目指す目標もあった。さらに、自分自身が大切にしたい思いを表明した目標を掲げる学生もいた。

実習の目標達成に関連する内容として、実習目標に含まれているキーワードを自分の言葉で具体的に表現し直した目標や、いくつかの目標に関連させた自己目標が含まれていた。実習地域の理解、コミュニケーションを通しての関係づくり、健康

課題やニーズに応じた地区活動の展開、地域生活集団に対する質の高い支援の提供、看護職の機能・役割に関連した目標が設定されていた。

自己の課題克服・自己成長に関する内容(表3)は、これまでの自己の学習経験から感じている課題の克服や、自己成長の機会として地域看護実習を活用しようとする内容であった。学生は、他の看護実習での学びを活かして学びを積み重ねることや、学習者としての基本的姿勢・態度を身につけることを意識した目標を設定していた。また、地域看護実習の特徴を踏まえ、グループワークを通じた自己成長を図る目標や、目的意識・広い視野・多面的視点・全体的視点を身に付けることをねらいにした目標を掲げていた。自分を変えていくため挑戦する内容を掲げた目標には、自己課題として、適切な言葉遣い、自己の思い考えの表出、笑顔、他者への積極的な働きかけが挙げられていた。

#### 2) 自己目標に対する評価

自己目標に対する評価は、117項目中、A. 達成できた: 72項目(61.5%)、B. 多少は達成できた: 42項目(35.9%)、C. あまり達成できなかった: 3項目(2.6%)、D. できなかった: 0項目であった。AもしくはBと自己目標の到達を肯定的に評価した学生は97.4%であった。Cと評価した3項目のうち、自己の課題克服・自己成長に関する目標が2項目; 「私は他者と積極的に話したり、話しかけたりすることに抵抗があり、苦手意識があるが、度胸と勇気を持って話をうかがっていきたい」「遅刻しないようにする」であった。地域看護学の学習に関する目標1項目は「地域の人の持つニーズがどのようなものか判断して、そのニーズに合わせた活動を考えることができるようになる。」であり、これは、グループではBだが、自分個人としてはCだったと評価していた。

### 2. 実習目標に対する評価

実習目標に対する学生の評価結果を表4に示す。

表2：地域看護実習での学習に関する自己目標

実習を通しての理解および実践力向上に関する目標	自己目標の内容	学生の立案した目標（抜粋）
実習目標の達成に関する目標	◇実習だからこそその 実際性・実施を強調する	・地域看護とは、どのようなものか実際の活動を踏まえて理解する。 ・自分達で地区の情報を収集し、地区の特徴や地域住民のニーズを理解することができる。 ・データ(統計)と地区踏査で得た情報を統合して、自分なりの地区の健康課題を見出す。
	◇講義・演習での学びを 踏まえる	・地域の得られた情報から、地域の健康課題を把握し、アウトリーチやポピュレーションアプローチなどの概念を用いた支援を考えることができるようになる。 ・学内での事例を使った看護計画での経験を活かし、グループ内での役割を果たし、担当地区特有の課題に介入していく実習にしたい。
	◇自分が特に学びたい ことを焦点化して示す	・母子が病院を退院して、どのように継続して母性を育んでいるか理解できる。 ・生活思考の看護や集団に対する介入方法について学ぶ。
	◇自分が大切にしたい 思いを表明する	・地域看護の意義や楽しさ、やりがいを理解できる。 ・保健師活動について理解を深め、根拠に基づいた活動計画を住民の立場に立って考える。 ・住民の方に良かったと思ってもらえるような健康講座を考えたい。
	◇実習地域を理解する	・受け持ち地区の地区踏査、情報収集の中で、実際にその地区で生活する住民との関わりや生活の場としての環境を見てその地域の理解を深める。 ・看護の視点から、地域の人々と関わり、地域の理解を深める
	◇コミュニケーション を通して関係づくり を行う	・明るく積極的に地域住民や職員の方々と接し、信頼の基礎となる人間関係づくりに励む。 ・地域の人とつながりをもち、コミュニケーション技術を使った円滑なコミュニケーションがとれる。
	◇健康課題やニーズに 応じた地区活動を展開 する	・コミュニティ・アズ・パートナーモデルに基づいた丁寧な地域のアセスメントと、地域の資源やマンパワーを生かした計画が立てられるようになる。 ・実際に地域の方々の声を聞いて、その関わりを通じて健康課題を見出し、実践可能な住民にとってより良い看護活動を考え、地域全体を捉えた看護について学ぶ。 ・地域の特性とともに生活者個々のニーズを把握し、対象者の生活に沿った援助を考え、実施できるようにし、保健師の機能・役割についての理解を深める。
	◇地域生活集団に対し、 質の高い支援を提供す る	・地域住民の声を聞き、その地区の健康課題を考え、住民のニーズに添えるようなケアプランを考え、健康講座を実施する。 ・ウェルネスの視点をもち、多くの対象者に興味・関心を抱いてもらえるような健康教育を行うことができる。
	◇看護職の機能・役割を 学ぶ	・保健師としてどのような行動・活動が大切であるか学ぶことができる。 ・保健師が具体的にどのようなことを大切にしながら活動しているのかを学ぶ。

表3：自己の課題克服・自己成長に関する自己目標

	自己目標の内容	学生の立案した目標（抜粋）
	◇他の看護実習での学びを活かし、学びを積み重ねる	・母性看護実習と同じで、地域も病気の人を対象にしているわけではないので、課題だけではなくウェルネスも大切にする。
	◇グループワークを通じた自己成長を図る	・グループにおける活動がほとんどだと思うので、きちんと自分がやらなければならないと思うことを見つけて、確実に実行し、グループの一員としての役割を果たす。 ・グループで協力して活動することで連携・協働することを学ぶ。 ・グループワークが多いので、メンバーと話し合いをする中でよいところを吸収する。
	◇自分を変えていくため挑戦する	・常に適切な言葉遣いで話をする。 ・自分の考え、意見を積極的に述べる。 ・人と関わる時は笑顔を絶やさないようにする。 ・私は他者と積極的に話したり、話しかけたりすることに抵抗があり、苦手意識があるが、度胸と勇気を持って話をうかがっていききたい。
	◇目的意識・広い視野・多面的視点・全体的視点	・目的を明確にして地区踏査を行う、そして多方面から分析を行う。 ・広い視野を持って考え、関わり、行動にうつすようにする。 ・病院とは違った、一人一人をみるのではなく、全体をみることができる広い視野を養っていききたい。
	◇学習者としての基本的姿勢・態度を身につける	・遅刻をしない。 ・体調管理を十分に行い、遅刻欠席なく実習に参加する。 ・実習を楽しむことができる。 ・宿題を忘れない。

表4：実習目標の自己評価

n=63

実習目標	回答数(%)			
	A	B	C	D
<b>目標1:地域住民のヘルスニーズの把握を通じて、地域看護の対象となる地域住民や地域への理解を深めることができる</b>				
1-1:地域(コミュニティ)の健康を個人・家族・集団のつながりの中で理解し、自分の言葉で説明することができる	41 (65.1%)	22 (34.9%)	0 (0%)	0 (0%)
1-2:生活の営みに沿った地域看護活動を展開するために、地域住民個人々々への生活行動や思い考え、及び、地域の文化や価値観から、地域住民に共通するヘルスニーズを捉えることができる	41 (65.1%)	21 (33.3%)	1 (1.6%)	0 (0%)
1-3:ライフサイクルや健康段階を継続的に捉え支援していく地域看護活動に関するニーズを捉えることができる	28 (44.4%)	33 (52.4%)	2 (3.2%)	0 (0%)
<b>目標2:地区診断により地域の健康課題を明確にすることができる</b>				
2-1:地域環境に対して、地域の健康課題を把握する上で必要な観察及び情報収集が実施できる	43 (68.3%)	19 (30.2%)	1 (1.6%)	0 (0%)
2-2:地域住民の健康状態・生活自立度・生活行動・セルフケア力・生活環境・ライフステージ及び地域の社会資源の観点から、情報を総合的に分析判断し、現在及び今後予測される実習地域の健康課題を見出すことができる	43 (68.3%)	17 (27.0%)	3 (4.8%)	0 (0%)
2-3:地域の統計情報や事業報告を分析し、実習地域の健康課題及び保健医療福祉活動の課題を見出すことができる	30 (47.6%)	29 (46.0%)	4 (6.3%)	0 (0%)
<b>目標3:地域住民に対する責任性を基盤に、地域住民や関係者との関係づくりを行うことができる</b>				
3-1:地域や事業を受け持つ看護職としての責任性を意識して、地域住民や関係職種とコミュニケーションを取ることができる	41 (65.1%)	20 (31.7%)	2 (3.2%)	0 (0%)
3-2:自分の身分及び活動内容、並びに看護職として何ができるかを住民に適切に説明し、実習地での事業参加や情報収集に対し合意を得ることができる	41 (65.1%)	19 (30.2%)	3 (4.8%)	0 (0%)
<b>目標4:地域看護活動の展開方法を習得することができる</b>				
4-1:地域看護活動の計画立案及び評価を実施することができる ◆モデルや理論を活用して系統的・計画的な地区診断を行い、活動計画を作成することができる ◆保健医療福祉の施策を踏まえ、住民のヘルスニーズに即した活動を展開するための基盤づくりや条件づくりを包含した活動計画が立案できる ◆活動計画の評価計画を立案することができる	35 (55.6%)	25 (39.7%)	3 (4.8%)	0 (0%)
4-2:公衆衛生看護活動の展開方法に関する理解を深めることができる ◆実習地の活動を踏まえ、ヘルスプロモーション及び予防の理念に基づく看護活動の展開方法を説明できる ◆実習地の活動を踏まえ、地域住民が健康で安心して暮らせる地域づくりを目指した活動について説明できる ◆実習地の活動を踏まえ、住民の健康増進や疾病予防を目的とした事業化及び施策化の方法について説明できる ◆実習地の活動を踏まえ、公衆衛生看護活動における個別支援の展開方法および特徴について説明できる	24 (38.1%)	37 (58.7%)	2 (3.2%)	0 (0%)
4-3:地域住民を対象とした集団健康教育を実施することができる ◆地域住民が自主的に健康課題を解決していけるような関わりができる ◆特定の発達段階の集団を対象として、対象の健康レベルや生活実態にあわせた援助内容や方法を工夫しながら健康教育を実施できる ◆実習地の活動を踏まえ、自主グループの育成及び地域組織活動の促進方法を説明することができる	39 (61.9%)	23 (36.5%)	1 (1.6%)	0 (0%)
<b>目標5:地域全体を対象としたケアのマネジメント方法への理解を深めることができる</b>				
5-1:地域住民や関係機関との連携・協働による地域看護活動展開方法への理解を深めることができる ◆実習地の活動を踏まえ、地域住民や関係機関との連携・協働による地域の健康課題解決の意義と方法を説明できる ◆実習地の活動を踏まえ、他機関・他職種との連携による地域保健医療福祉サービスの展開方法について説明できる ◆実習地の健康課題解決に向け、連携すべき相手と連携の具体的方法を示すことができる	23 (36.5%)	38 (60.3%)	2 (3.2%)	0 (0%)
5-2:地域の保健医療福祉資源の充実及び地域のケアシステム構築に向けた地域看護活動の展開方法への理解を深めることができる ◆実習地の活動を踏まえ、個々のケアマネジメントから地域のケアシステムづくりにつなげる方法を説明できる ◆実習地の活動を踏まえ、地域の保健医療福祉資源の充実および質の維持向上を目的とした看護職の活動の意義と方法を説明できる ◆実習地の活動を踏まえ、地域における看護職の健康危機管理における機能・役割及び活動方法について説明できる	10 (15.9%)	50 (79.4%)	3 (4.8%)	0 (0%)
<b>目標6:地域看護活動を通して、看護専門職者としてのアイデンティティが形成できる</b>				
6-1:地域で生活する人々の健康生活を支援する看護職の機能・役割を、自分の言葉で説明することができる	41 (65.1%)	22 (34.9%)	0 (0%)	0 (0%)
6-2:看護職としての自己の学習課題を分析することができる	41 (65.1%)	22 (34.9%)	0 (0%)	0 (0%)
<b>目標7:地域で生活する人すべてがその人らしく生活する権利を守るために必要な地域看護活動について理解を深めることができる</b>				
7-1:実習地の活動を踏まえ、差別や偏見をなくすことを目指す地域看護活動の意義と活動方法を説明することができる。	32 (50.8%)	26 (41.3%)	4 (6.3%)	1 (1.6%)
計	553 (54.9%)	423 (42.0%)	31 (3.1%)	1 (0.1%)

中目標16項目に対し63名が行った評価1008の内訳は、A. 達成できた：553（54.9%）、B. 多少は達成できた：423（42.0%）、C. あまり達成できなかった：31（3.1%）、D. できなかった：1（0.1%）であった。AもしくはBの評価の総数は976であり、96.8%が目標達成を肯定的に評価していた。

Aと答えた学生の割合が最も高かったのは、【目標 2-1：地域環境に対して、地域の健康課題を把握する上で必要な観察及び情報収集が実施できる】と、【目標 2-2：地域住民の健康状態・生活自立度・生活行動・セルフケア力・生活環境・ライフステージ及び地域の社会資源の視点から、情報を総合的に分析判断し、現在及び今後予測される実習地域の健康課題を見出すことができる】の68.3%であった。続いてAの割合が65.1%と高かったのは、【目標 1-1：地域（コミュニティ）の健康を個人・家族・集団のつながりの中で理解し、自分の言葉で説明することができる】、【目標 1-2：生活の営みに沿った地域看護活動を展開するために、地域住民個人々人への生活行動や思い考え、及び、地域の文化や価値観から、地域住民に共通するヘルスニーズを捉えることができる】、【目標 6-1：地域で生活する人々の健康生活を支援する看護職の機能・役割を、自分の言葉で説明することができる】、【目標 6-2：看護職としての自己の学習課題を分析することができる】の4項目であった。目標 1-1、6-1、6-2の3項目は、全員がAもしくはBと目標達成を肯定的に評価していた。

一方、Aと答えた学生の割合が低かった項目は、【目標 5-2：地域の保健医療福祉資源の充実及び地域のケアシステム構築に向けた地域看護活動の展開方法への理解を深めることができる】の15.9%であった。次に低いのが36.5%の【目標 5-1：地域住民や関係機関との連携・協働による地域看護活動展開方法への理解を深めることができる】と、38.1%の【目標 4-2：公衆衛生看護活動の展開方法に関する理解を深めることができる】であっ

た。これらの目標でCもしくはDと評価したのは2ないし3名であった。

Cと評価した学生のいた実習目標は16項目中13項目であった。Cと評価した学生は、最大4名、最少1名であった。目標 2-2のように、Aとした学生の割合が最も高い項目であっても、Cと評価した学生が3人いた。

## VI. 考察

### 1. 自己評価導入の効果と課題

自己目標の導入は、目標 6の実施に向け導入したものである。目標 6に対する自己評価で全ての学生がAもしくはBという肯定的評価をしており、Aと答えた学生の割合が高いことから、自己の学習課題の分析を促進する、という目的は果たせられたと判断する。

これに加え、自己目標として実習目標と関連した目標を設定している学生がいることから、目標 6だけでなく、すべての実習目標に対する理解の深まり・明確化・焦点化につながったことが確認できた。実習目標の評価を見ると、Aと答えた学生が6割以上となったのは、目標 1-1、1-2の地域住民や地域への理解、目標 2-1、2-2の地区診断、目標 3-1、3-2の地域住民や関係者との関係づくり、目標 4-3の集団健康教育、そして目標 6-1、6-2の看護専門職者としてのアイデンティティ形成である。これらの項目は、自己目標において、実習内容と関連した目標として挙げられていた内容であった。このことから、学生が、実習目標を実習内容と結びつけ、自分の言葉で自己目標として再構成したことで、実習目標に対する理解と、実習目標に対するコミットメントが高まったのではないかと推察する。実習開始前に自己目標設定の過程を通じて実習目標全体の理解が進むことは、実習中の学生の意識や行動にも影響する。実習中、自分の目標として意識し主体的に取り組むことで、結果として、全ての実習目標到達に効果が波及す

ると考える。

地域看護実習の実習内容に関連する目標には、講義・演習の学びを踏まえた目標や、自分が特に学びたい内容を焦点化した目標も含まれていた。学生は、実習前に準備として講義・演習の復習を行っている。自己目標の設定は、復習した内容を実習において主体的に活用しようとする意識付けになったと思われる。さらに、自己成長・自己の課題の克服に関する目標が挙げられていたことは、実習が自己成長・自己の課題の克服の機会であることをより強く意識させることにつながったと考える。

以上より、自己目標を導入した効果として、①実習目標に対する理解の深まり・明確化・焦点化につながる、②講義・演習での学びを主体的に発展させようとする意識につながる、③自己成長・自己の課題の克服がより強く意識される、の3つがあったと考える。

一方、今後の検討課題として、自己評価の結果が低かった学生のフォロー、実習中における自己目標到達へのサポート方法の検討、評価段階（A B C D）の設定に関する検討が挙げられた。

今回、実習目標をDと評価したのは1項目1人、Cと評価したのは、実習目標31、自己目標3項目と、全体の2～3%の割合であった。これらC及びDと評価した学生の自己評価用紙を確認したところ、学生は皆、今後の課題と自らの力で課題を克服する方策について考え、評価用紙に記載していた。自己評価の目的は自己の学習課題の明確化であることから、学生自身が自己の実習を振り返り、今後につなげることができるとを指すことが、教員の関わりとして最も重要だと考える。その上で、実習目標に対しては、実習期間中に学生自身の自己評価を確認し、DないしCの項目の到達度を上げるための方策を考えさせる関わりも必要である。また、教員からみた到達度評価とのずれがないか確認していくことも重要だと考える。

一方、自己目標はあくまで学生自身の目標であるため、実習中の指導やフォローに限界がある。

目標の到達を肯定的（AもしくはB）に評価した学生は、自己目標が97.4%、実習目標が96.8%であり、自己目標が0.6%とわずかに高くなっていた。実習中、教員から学生の自己目標到達に向けた関わりを積極的に行うことがなかったことから、このことは、学生自身が自己目標の達成に向け主体的に取り組んだことの表れだと考える。教員の関わりとして、実習前に自己目標の性質について十分説明すること、また、実習中必要に応じて学生自ら教員にサポートを要請するよう伝えていくことが重要だと考えた。

評価の段階については、評価の曖昧さをなくすことを意図して、4件法で実施した。選択肢が限られる分、それぞれの段階がどの程度の目標到達度にあたるのか、意図的に項目設定をすることが、効果的な自己評価につながると考える。そのため、項目の表現や基準の提示について、今後検討が必要だと考える。

## 2. 地域看護実習の改善に向けた方策

今後、地域看護実習において、自己評価の活用を促進し、効果を高めるための方策を検討した。

実習目標の中で到達度評価が比較的低かった目標5と目標7について、指導方略を明確化する必要性が高いと考える。実習地での体験により、目標到達に差が生じることは実習の特徴でもあるが、目標5と目標7は特に学生が実際の体験として学ぶ機会が限られる内容である。そこで、より学生が実習目標を意識して実習に臨むことにより、具体的事象と目標の内容を結び付けて考えられるよう、実習前のオリエンテーションを強化する必要がある。例えば、目標毎に、どの実習プログラムで学べるかを学生に提示するなどの工夫により、主体的な目標到達への取り組みを促進する必要がある。

また、目標5は、地域全体を対象としたケアマネジメントの理解に関する目標であり、4回生で実施する看護管理実習と一部重なる内容及び目標設定となっている。目標7も、住民の権利擁護に



関する内容であり、4回生の総合看護実習で重点的に学ぶ機会がある。このことから、必ず全員がAを目指してほしい目標と、少なくともBを目指してほしい目標を分けて提示するなどの工夫が必要であると考え。さらに、最低到達度が学生に伝わるよう、目標の表現の精練と目標の説明を強化する必要がある。

自己目標に関しては、今回、学びたい内容の焦点化、自分が大切にしたい思いの表明、自分を変えていくための挑戦が含まれていた。これらの目標は、学生自身の学習ニーズが表現されたものであり、だからこそ、学生による主体的な目標達成につながったのではないかと考える。学習ニーズには、学習者の興味、関心に加え、学習者が目標達成に必要と感じている知識・技術・態度が含まれる<sup>3)</sup>。杉森らは、成人学習において、学習者が自己の学習ニーズを明確に知覚することにより、効果的に学習を進めていける<sup>4)</sup>ことを指摘している。このような目標が設定された要因として、自分自身の目標は何でもいいこと、学生の評価の高低を成績に考慮しないことを明示したことにより、自由な発想による目標設定が促進されたのではないかと考える。また、自己目標は、学生が自分の言葉で表現したものであり、学生の看護観を反映している。そのため、どんな目標であったとしても、まず、教員がその目標を尊重する姿勢を示すことが重要だと考える。

その上で、実習内容や講義・演習の学びを踏まえ、実習目標全体の達成促進を図ることができる。また、挑戦し達成することが可能な目標を自己設定し、実際に達成することを通して、学生の自己効力感を高めることが可能だと考える。そこで、学生がより適切な自己目標を設定できるような支援を強化していく方策が考えられる。これに関連して、実習開始時に学生と教員で各自の自己目標を共有する時間を持ったことにより、他の学生の目標を聞いて自分の目標を修正する学生がいた。修正は、より適切な目標設定に向かうこともあれば、周りに合わせることで自分の本来の望みから

外れた目標になる可能性もある。そこで、教員の関わりとして、自己目標を設定する意図を伝えながら、学生それぞれが目指す看護職像に近づくことを意図した目標の設定について助言することが重要だと考える。

自己目標導入の効果と自己評価を実施する際の指導との関連を、ガニエ<sup>5)</sup>の提唱した9教授事象から検討した。自己評価の導入は、「8. 学習成果を評価する」にあたる。しかし、自己評価を行うためのプロセスの中に、その他の教授事象が含まれていると考える。最初に自己評価の目的を伝えることは、「1. 学習者の注意を喚起する」にあたる。そして、目標の立て方に関する説明や実習目標の提示は、「2. 学習者に目標を知らせる」、「3. 前提条件を思いださせる」、「4. 新しい事項を提示する」、「5. 学習の指針を与える」指導となっていた。さらに、実習後の評価の段階で今後の課題を考えさせることは、「9. 保持と転移を高める」となっていた。これらの指導方法が組み合わされたことで、当初のねらいであった目標6の看護専門職者としてのアイデンティティ形成にとどまらず、拡大した効果が得られたと考える。このことは、評価の実施プロセスにおける教授方法を工夫することで、実習効果全体が高められることを示している。

看護系大学には、学生や社会から期待されるニーズの多様化に積極的に対応し、教育の質を確実に保証・向上させていくことが期待<sup>6)</sup>されている。今後、実習効果全体の向上を図る教授方法のひとつとして自己評価を活用できることを意識して、学生の指導にあたることが重要だと考える。

### 3. 今後に向けて

本報告の結果は、学生の自己目標の内容及び学生による目標到達の評価の分析によるものである。そのため、学生がどのような理由や思い考えで自己目標を設定したかについては明らかになっていない。また、到達度を自己評価した基準・根拠についても確認していない。今後、学生が自己目標

や実習到達度評価の際、どのような基準・根拠を用いているか、また、実習中にどのように自己目標を意識し、活用したかについて調査することで、さらなる教育方法の向上を図っていきたい。

#### 謝辞

ご協力いただきました学生の皆様、および教職員の皆様に感謝いたします。

#### 文献

- 1) 田島佳子：看護教育評価の基礎と実際. 第1版, 医学書院, 3-4, 1989.
- 2) 武藤紀子, 石川麻衣, 山田洋子他：地域看護実践能力の向上をめざす到達目標を用いた学士課程の教育方法の検討. 千葉大学看護学部紀要, 26, 51-56, 2004.
- 3) 三浦弘恵：保健師の教育ニード・学習ニードの測定とその意義. 保健師ジャーナル, 66 (4), 342-347, 2010.
- 4) 杉森みど里, 舟島なおみ：看護教育学第4版増強版. 医学書院, 335, 2009.
- 5) ロバート・M・ガニエ, レスリー・J. ブリッグズ：カリキュラムと授業の構成. 北大路書房, 1986.
- 6) 石橋みゆき, 辻邦章, 西尾和幸：平成23年保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正に伴う看護系大学における新カリキュラムの概要教育課程の変更承認申請の内容から. 看護教育, 53 (5), 398-403, 2012.